

ばらく押し問答をしたが、やがて所長が、「よし、お前も帰す。準備しろ。ただし約束がある。実行するか、必ず実行するなれば次のことを約束しろ。」「はい、必ず」と、「内地へ帰ったら抑留中の民主化教育の運動に打ち込むこと」を約束し、「よし、班内に帰れ」私の胸中何ものがあつた。班内に帰った私は、年老いた母、亡き父、亡き妻、四人の子供に、かくもよい知恵を私に与えてくれたことが、これぞまことに御仏の加護ありと信じ、感涙した。

昭和二十二年二月十一日早朝、一装用軍服を着用した帰還部隊は、残留同士に心を傷めながらハバロフスクを後にした。

海の見える丘、これぞナホトカ港であつた。湾内に日本漁船が日章旗をなびかせ沈没していた。懐かしい日章旗、印象的だった。

俘虜記

鳥取県 竹安熊市

私は、時局ひびくせる昭和二十年三月一日姫路中部五四部隊に入隊後、同年五月二十日満州国間島省琿春野戦第二六四二部隊自動車隊に転属、鮮満ソ国境警備の任につきました。

ところが、赴任して間もない八月九日未明、突如としてソ連軍は飛行機と戦車を主体に琿春へ侵入してきました。部隊は琿春の死守を命ぜられ僅かばかりの武器と小銃で応戦、極めて不利な戦況でした。ソ連兵は怒濤のように押し寄せ無差別に機銃掃射をしかけてまいりました。ソ連軍の発する信号灯は西に東に舞い始め、一面火の海と化する中、私は被弾にて左手小指を負傷した。司令部よりの音信も途絶え、私たちは不戦のまま八月二十日ころ八道河において終戦の詔勅を知らされると同時に、武装解除されソ連軍の指揮下にはいる。

ウラジオストック經由帰国させるとのこと、貨車積みとなって北西に向かった。零下十余度の寒空にどこへ連行されるのか全く見当のつかぬ不安と精神的打撃の上に、さながら生ける屍としての一週間でした。当初は血涙にむせっていたが、固く閉め切られた真つ暗な貨車の中に無言でうごめく人々は、ただ黙々として何も語らない。まぶたを閉じ、うつむいているのは、遠く故国に残した家族の安否を思っているのであらうか。私もさまたまな思いが去来し故郷の追憶にひたりながら『無事でいてくれよ……自分は石にかじりついても生きて帰るから、必ずや相まみえるときがあるだろう』と父母兄弟の無事を祈った。案の定、貨車の着いたところは、帰国のための港ではなく、寒々とした中、徒歩で二時間ほどのところにあるコムソモルスク収容所でした。

ラーゲル（捕虜収容所）での苦勞

朝、私たち作業隊がラーゲルから出る場合は、門番の下士官とカンボーイ、それに日本側の引率者が人員の確認をする了解が出れば開門する。我々日本人であればこの程度のことは五分もあれば済むと思うのだが、この単

純作業に毎日のことながら三十分以上もかかるから閉口した。氣候のよい夏場であれば時間は気にならないが、零下四十度となる冬場ではたまらない。室内で暖まった身体が三十分も戸外で立たされると、どんなに足踏みをしていても、全身が凍るように冷えてしまう。作業隊の人数はその日によって異なるが大体五十人前後である。

私たち五十人の作業隊は石割り作業に従事させられ、道具はハンマー、ツルハシ、タガネ等、ソ連人カマンジール（監督）が作業の指図をする。石山にて一人のノルマ（基準）と場所を告げる。作業はなかなか進まず一日一立米もできない。その日の外気温は零下五十度でした。私は作業中踵春で負傷した左手小指が凍傷にかかり、見る間に白くなり手の感覚がなくなりました。収容所内にてソ連人女医により手術。手術と言えば聞こえはよいが名ばかりにて、指をはさみで切り骨は金切り鋸で切りました。激痛とともに三日間四十度を超える高熱が続き、生死の境をさまよいました。にもかかわらず女医は「君は左手は仕えないが、右手で労働はできるはずだ」と、とても自傷者に対する言葉とは思えなく無念でなり

ませんでした。戦争に敗けるとは、このようなことなのか。まるで奴隷だ、奴隷とはこのような姿を指しているであろうか。さながらここでの生活は地獄であると解するほかはなかった。

一日二百グラムの黒パンと塩スープで重労働に追いまくられた。しかもなれない酷寒の中で……。「いつか故郷へ」この一念が支えとなり精神力で耐え忍んだ。やせ衰えて骨と皮になりながらノルマの上にノルマを課せられ、入所当初は日本人上官からも殴る蹴られるで酷使された。なかなかノルマ達成できなく、いつも平均三〇%しかできず、収容所に帰ってからは、夕食はパーセントがあがらないので大豆が二十粒くらい入っていれば上々、一口か二口に満たない黒パン三百グラムでした。一日三〜四時間の睡眠と足を引きずりながらの重労働、極度の栄養失調により四十度の高熱が続く苦難苦痛の毎日でした。しかも夜にはソ連政治部員に指導され、日本人アクチーブの共産主義、マルクス・レーニン主義の教育でした。コムソモルスク収容所での二年間は、捕虜は奴隷であると言わなければならないソ連側のあまりにもひどい

仕打ちでした。

コムソモルスク収容所から貨物列車に乗せられナホトカ港へ移送され、引揚船到着までの二日間ほどテント生活、しかしだれかがそのテントを切り取り雑のうをつくったのがソ連人カンボーイに見つかり連行されて行った。私たちもそれにより共産主義の教育が足りないとの理由で再び収容所送りとなった。そこで二か月間労働従事させられ、やっと乗船許可が出た。

やっとの思いでナホトカ港より、引揚船・第一大拓丸に乗船したが、寒さ厳しく、また船酔も併せ、とても安眠安息できるようではなかった。しかし船酔していない者がいろいろと介護に当たるさまを見るにつけ、シベリアでのつらいつらい二年間も、日本人同士の温い友情を目の当たりにし、どんなにか慰められ力づけられたことか、生きて日本に帰れることの実感が湧いてきた。

疲労困憊の中、やっと故国の山々が見え、舞鶴港に入港したのが二十二年五月二十二日、一日千秋の思いの故国日本の土を踏めました。

今もあのとき見た若葉のみずみずしさがまぶたに熱く

焼きついて離れません。

まだ寒中に切断左手指が疼きます。

シベリア抑留記

新潟県 宇野 公夫

八月十五日終戦の日を迎えシベリア抑留生活が始まろうとはだれしも想像もしなかったので、ある人は四年ないし五年の長期間にわたり苦闘を経験し、復員し、その後日本復興のため全力をふるい生き延び今日を迎えております。

また、不幸にも猛烈な寒さと食糧不足のため、病魔に冒されてかの地で若き命を落とされた人たちも数多く、これら人々のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

終戦から武装解除まで

小生は北鮮会寧泰二二一五三部隊（歩兵部隊）に入隊の初年兵で、一期検閲後鐘城の奥地蒼坪でタコ壺堀りに従事し、八月十二日から十五日まで斥候として（五人）

南陽から鐘城に通ずる小高い山で眼下を走る道路の監視を任務として過ごし十五日晩、山よりおり大隊本部により斥候任務を終了した旨申告しましたところ、ご苦労だけれども一回山へ登るよう命令され、再び前回地点まで行くべく沢登りを始めたが、途中雨となり仕方なく野宿、翌朝十六日任務地点に到着、昨晩ぬれた軍服、下着類を乾燥しておったところ運悪くソ連飛行機に発見され銃撃を受けたが、全員無事で任務遂行しておったところ、夜八時ごろ中隊よりの迎えにて下山、隊に合流し早速その晩陣地を出発しました。十九日午後二時ころまで満州図們に集結の命令で、全員武器及び完全軍装で山中を歩きつづけようやく十九日午前図們に到着したところ、早速武装解除されました。携行食糧も少なく翌日からの食物に事欠き、先着部隊の人から満鉄の官舎へ行つて何か調達した方がよいと聞かされ、早速官舎へ行つて見たが、食物らしいものは何もなく、あったのは馬糧のコウリャンだけで、二、三日経過して延吉へ出発、抑留生活の第一歩から食糧に悩まされました。

延吉からクラスキーへ